

御城御普請所御願濟絵図 (75.5 × 76.5cm)
年次不詳 高崎市史料



壮大な規模を誇る高崎城

郭内だけで5万坪を超える広さ



高崎城の面影を伝えるお堀

お堀は、かつての城の大きさを感じさせてくれる場所だ。今残っている高崎のお堀は、慶長3年(1598)に井伊直政が築いた高崎城の一番外側の「三の丸堀」で、現在の総延長で1.1kmもある。江戸期の城跡が、群馬県内でこれほど立派に保存されているのは、高崎城以外にはない。高崎城址は高崎を訪れた人に、ぜひ歩いてほしい自慢の散策スポットだ。

● 壮大な高崎城の縄張り

天正18年(1590)、徳川家康は江戸に入府すると、四天王の一人、井伊直政を北関東の要、箕輪城(高崎市箕郷町)に入城させた。慶長三年(1598)、直政は中山道と三国街道の分岐点、和田に城を築いて、地名も「高崎」と改めた。高崎城は、郭内だけで5万坪を超える壮大な規模で、関ヶ原の合戦の際、中山道を西進した徳川秀忠の軍勢3万が

城内に駐留できるほどだった。

高崎城は、持久戦も含めた攻防が計算された城で、三層櫓造りの本丸は、現在の和田橋東のN.T.Tあたりにあった。その周りに二の丸、三の丸があり、本丸堀、二の丸堀、三の丸堀と土塁で三重に囲まれていた。土塁の上には塀が廻らされ、鉄砲や矢で迎え討つための小窓や狭間が設けられていた。二の丸堀の発掘調査では、深さが6~7mで、敵の侵入を防ぐため、堀の底には升目状に深く掘り下げた「障子堀」と呼ばれる罠が見つかった。

現在残っている三の丸堀は、本丸堀や二の丸堀に比べて浅く幅も狭い。土堀のために深さは不明だが、高崎市によれば、今は50cmから1m程度の水深ではないかという。

● 市民が憩う桜の名所

現在、お堀の土塁には270本ほどのソメイヨシノが植えられ、市民が憩う桜の名所となっている。高崎時代はまだ桜はなく雑木が植えられていた。ちなみに高崎公園のハクモクレン

は、高崎城主・安藤重信が元和5年(1619)に植えたときからである。

城址公園として本格的に整備されたのは1990年代以降で、お堀のフェンスは、ブルーノ・タウトに親交した故・水原徳言さんがデザインしたものだ。かつてはお堀でスケートができたとか、鯉を釣ったという話もたくさん残っている。戦中の食糧難では、お堀のカエルまで食用にされたという。

● 歴史を楽しめる公園に

群馬音楽センターの東側に、高崎城の乾櫓と東門が復元されており、お堀とともに高崎城址のシンボルになっている。乾櫓は、もとは本丸の北側にあり、維新後、民間に払い下げられたが、昭和52年に現在地に復元された。乾櫓は群馬県内で唯一残る城郭建築で、とても貴重だ。東門は、市役所前の信号の少し東側、お堀の「出柵形」となっていたものだ。高崎城は、詳細な絵図面が残っていて、その気になれば、当時そのままに復元できるそうだ。